
フォビアの五人 セカンド

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォビアの五人 セカンド

【Nコード】

N22800

【作者名】

k a j i

【あらすじ】

みんな何かしらフォビア（恐怖症）を持っている。しかし、我々はそれらとうまく付き合って行かなければならない。僕はひなたに元気を出してもらったために再び幼馴染みの力を借りて立ち上がった。

深口ひなた（ふかぐちひなた）

音恐怖症

和楽啓太 わらくけいた

タイ人恐怖症

中里仁
なかざとじん

中村恐怖症

手倉森結衣
てくらもりゆい

最先端恐怖症

沢木綾乃
さわきあやの

接触恐怖症

第1話「あの子に克服できるのなら私にも克服できるんじゃないかしら作戦再び」

前回の『あの子に克服できるのなら私にも克服できるんじゃないかしら作戦』が成功？に終わりひなたも前よりも元気になった。幼馴染み限定だが周りの人間と交流を持つようになった。再び俺たち幼馴染みの絆も深まり、全てが正しい方向に進んでいた。

深口ひなたは『音恐怖症』だ。音を異常に怖がる。そのため常にノイズキャンセリングヘッドホンの装着していなければならぬのだ。そうしていないとひなたは具合が悪くなって日常生活が満足におくれない。最近、ひなたは一時期よりは元気を取り戻していた。ただひなたの音恐怖症が克服できた訳では無いし根本的な解決にはなっていないかった。ひなたは前よりも笑うようにはなつたし元気にはなつたが僕はまだ満足していなかった。そこで再び『あの子に克服できるのなら私にも克服できるんじゃないかしら作戦』を実行に移すことにした。

ひなたを抜かした幼馴染みの三人、中里仁と手倉森結衣と沢木綾乃を放課後、空き教室に集めた。

「啓太。なんだ。急に」

「お前ら。気がつかないのか！」

「なんだ。啓太。急に」

「全く解決になっていないんだよ！ 仁。どうしてくれるんだ！」

僕は仁を掴んで揺さぶる。

「啓太。全く……は。話が見えないぞ」

「止める。貴様ら！」

「「ぐはー！」」

僕達は綾乃のキックで後頭部にそれぞれに食らった。おかげで僕は冷静さを取り戻した。

「全く話が分からん。和楽。順を追って説明しろ」

「そうだよー。いきなり訳が分からないよー」

綾乃は僕たちを蹴った時に乱れた服装を直して椅子に座った。結衣は最近のお気に入りの携帯型のパズルに夢中だ。

「僕はひなたに元気に過ごして欲しいんだよ！」

「またひなたか……」

「和楽。ひなたは前よりも元気になったと思うぞ」

「確かにそうなのかも知れない。でも全く根本的な解決にはなっていないんだよ」

「啓太。お前。まさか……。ひなたの音恐怖症を治したいとか思っているんじゃないだろうな」

「思っているよ。その何が悪い。前にも言ったが俺はひなたには普通の女の子として生活して欲しいんだよ！」

「和楽。言っておくが私たちは医者でも何でも無いのだぞ。私たちにひなたの恐怖症をどうにかできる訳がないだろう」

「そうだ。啓太。お前の気持ちは分かるがこればかりは仕方がないだろ」

「お前らはそうやって諦めるのか！ そうやって全て諦めてしまうのかよー!!」

僕は幼馴染みのあまりの不甲斐なさのあまり思わず机を思い切り両手で叩いた。こいつらがこんなやつらだとは思わなかったよ。

「僕は諦めないぞ。ひなたの恐怖症を治して、仁、綾乃、結衣。お

前たちの恐怖症も治してみせる。もちろん僕のタイ人恐怖症もだ。お前たちだつて直せるものなら治したいだろ。恐怖症」

「ま。まあそうだけだよ」

「だろ！ だからもう一度やろうと思うんだ。『あの子に克服できるのなら私にも克服できるんじゃないかしら作戦』を」

「またあれをやるのか……」

「ああ。わたしちょっと。用事思いたしたー」

「まあ。待てよ。今回は僕たちがやるわけじゃない」

僕は教室から出て行く結衣を掴んで止めた。

「俺たちじゃないのか。じゃあ誰の恐怖症を克服するんだ」

「いや。それはまだ考えていない。誰か良さそうな素材はいないか知らないか？」

「誰か他の人間の恐怖症を克服させるっていうのか」

「そうだ。それでその人間の恐怖症が成功したら同じような手順でひなたの恐怖症も克服させるんだ。どうだ！ いい考えだろ」

「……」

「……」

「……」

「お……おい。みんな何か言ってくれよ」

「いや。なんていうか」

仁が珍しく口籠っている。言いたいことがあるならばはっきりと言って欲しい。他の二人も同じような感じた。いったいどういうことだろうか。

「なんだ？」

「いや。いい」

「まあ。いい誰か知らないか。恐怖症を持っているやつ」

「心当たりがないわけではないが……しかしどうしたものか」

綾乃が声をあげた。意外な所からの声だったので僕は少々驚いた。

「誰？ 教えてくれ」

「あまり言いたくないのだが。まあそうだな。私の弟なのだが」

「弟？ 綾乃には弟がいるのか？」

「頼斗君のこと」

「そうだ。私の弟はなぜか大の女性恐怖症でな。私も何とかしないといけないとは思っているのだがなかなか」

「なるほど。分かった。じゃあ明日にでも早速ここに連れてきてくれ。悪いようにはしないから」

「ものすごく不安なのは私だけだろうか……」

「いや。俺もものすごく不安だから安心しろ」

「よし。待っているよ。ひなた。きっとお前の恐怖症は俺が治して見せるからな」

僕は拳を握って眩しいくらいの夕日に誓った。きっとひなたはこの僕が救って見せる。

「それにしてもこいつはなんでこんなにひなたにご執心なんだかね」

「綾乃さん。愛ですよ。愛」

「ふ……。歪んだ。愛だな」

他の幼馴染みの不安を他所に僕は燃えていた。なぜか今の僕は恐怖症を治せそうな気がしてしかたがなかった。必ず、綾乃の弟の恐怖症を治して見せる。そして、必ずひなたの「音恐怖症」も治して見せる。そしたらひなたと昔のように笑い合って生活できるはずだ。

第1話「あの子に克服できるのなら私にも克服できるんじゃないかしら作戦再び

ご拝読ありがとうございます。

前に投稿していた『フォビアの五人』の続きを書いてみました。
よろしく願います。

第2話「女性嫌い」

僕は目を改めて女性嫌いだという綾乃の弟をいつもの教室に呼び出した。もちろん綾乃と結衣と仁にも来てもらった。

「君が頼斗君か」

「ああ。なんだよ。何か。用なのか。啓太さん」

綾乃の弟を見て、思い出したが僕はいいつに会っている。昔、確か少し遊んだことがあった。僕が頼斗君を加えてかくれんぼをして彼が鬼の時にそのまま俺たちは彼を置いて帰った時以来だ。後で綾乃の家では弟がいなくなっただということとで捜索隊が出て大騒ぎになったらしいが僕は我関せずでゴールデンタイムの探偵アニメをのんきに見ていたことを思い出した。

「こいつ口悪いな」

「和楽。すまん。こいつは昔から口が悪くてな。私も困っていた所だ」

「まあ。いい。大目に見る。頼斗君。用というのは他ではない。君の女性嫌いを治してやろうと思っただけだよ」

「だ。誰がそんなことを言っているんですか？」

「ん？ お前の姉ちゃんだよ」

「そ。そんなことはありませんよ。僕は至って正常です。女性嫌いなどでもありませんよ」

「じゃあ。何でそんなに教室の端っこにいるんだ」

みんなあえて突っ込まなかったが頼斗君は不自然なくらい教室の端っこに位置していた。それなので僕は少々大きな声で喋らないと彼

に声が届かないのだ。全く疲れる。

「ぼ。僕はですね。端っこが好きなのですよ。ほら言うじゃないですか。教室の端っこは風水的にとてもいいのかなんとか……」

非常に苦しい言い訳だったが僕はおるか彼の姉さんである綾乃まで突っ込まなかった。僕は「ほら。いい突っ込みチャンスだ。突っ込めよ」というアイコンタクトを仁に送ったが仁は僕のアイコンタクトを見事にスルーして見せた。全くなかりだよ。

「おい。コラ。頼斗よ。ネタはあがっているんだ。さっさと白状せんか！」

「啓太さん……。いい加減にしてくださいよ。これ以上僕を侮辱するのなら僕にも考えがありますよ。名誉毀損であなたを訴えますからね。僕にはいつでも法廷に出る準備がある。それだけは忘れないてくださいよ」

「じゃあ。啓太の弟1。お前そこでパズルをしている馬鹿丸出しの女に近づいてみるよ」

話が変わる方向に転がりそうな所を仁がうまくアシストしてくれた。さすが僕の親友だ。

「な。何を言っているんですか。言っている意味が分かりませんよ」「分かった。そういう態度を取るんなら俺も強硬手段に出るしかないな。なあ。啓太」

「ああ。できるなら僕はこういった方法は取りたくは無かったが仕方が無いね」

「な。何をするんだ」

「こうするんだよ！ 結衣ちゃん。綾乃の弟1がねー。結衣ちゃん

んとお友達になりたいんだってー。だからさー。パズルなんて止めて。彼と遊んでくれるとうれしいなー」

「んー。わかったよー。らいとくーん。わたしとパズルで遊ぼうかー」

色気には乏しいが僕は結衣を使って頼斗君の化けの皮を剥がしにかかった。結衣も生物学上は女性に位置している。結衣が近づけば頼斗も女性嫌いのリアクションを取るはずだ。

「ねー。何でわたしとそんなに距離を取るのー？」

「頼斗君。結衣先輩のスキンシップを拒否するのか？ まさかそんなことをする訳ないよな」

「い。いや。あのですね。ちょっと寒気が来ましてですね。少しでも温かい所に移動しようと思っていたんですよ。ほら言っじゃないですか。猫はできるだけ温かい所を探して移動するって」

「……………」

誰も突っ込まないが計算通りだ。結衣が頼斗君に近づくと頼斗君は結衣と近づくだけ離れるようになっていらい。目算だが頼斗君のパーソナルスペースはおよそ半径2m以内のようだ。女性は彼の2m以内には入れないような仕組みになっているようだ。全く難儀な男だ。

「わー。なんか面白いー」

「ゆ。結衣先輩。お願いしますから止めていただけますか？」

「えー。何でー。だったら頼斗君が止まればいいんじゃないー？」

結衣はパズルよりも頼斗君に近づくことが面白いことに気がついてらしく。今はものすごい速さで教室中を追い回していた。僕は昔の外国のアニメのトムなんとかみたいたと思った。

そして、ついに結衣は頼斗君を追い詰めて抱きついた。よし。よくやったぞ。結衣。結衣と知り合ってから10数年になるが初めて結衣が居てよかったと思った。

「っーかまえた」

「止めてください！ 止めて……！ ……止めるおおー！」

「きゃああー！」

頼斗君は急に態度を急変させて結衣を突き飛ばした。

「おい。僕の結衣に何をする気だ」

僕は思わず頼斗君を掴み上げた。お前タダで済むと思うなよ。結衣はな。僕の23番目の嫁なんだぞ。ふざけるな。お前はデコピンの刑に処すことにする。僕はこう見えてもデコピンの強さは誰にも負けないんだからな。

「ふふふ。啓太さんが悪いんですからね……」

頼斗君は不気味な笑いを洩らすとどこからか木刀を取り出した。こいつ木刀をどこに隠していやがった。物理的に不可能すぎる。

「止める！ 頼斗。素人に剣を向けるなんて剣道三段が泣くぞ」

「ふふふ。僕は何も悪くない。悪いのはいつも他のみんななんだ」

「駄目だ。聞こえちゃいないぞ」

「死ねー。 &ふあおもえうおおーの」

頼斗君は僕に竹刀を振りあげて僕の頭を力手割ろうとしている。これはまずい直撃コースだ。さすがに竹刀を頭に食らったら僕の得意な受け身でもどうにもならない。どうする。どうする。どうする。

どうにもならない。死にそうになる時、周りが止まって見えるのは本当なんだな。全ての物がゆっくりと見える。仁、結衣、綾乃そして今はここにはいないけどひなた。ごめん。僕は君を救ってやることができないさそうだ。僕は目を瞑ってひなたに詫びた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280o/>

フォビアの五人 セカンド

2010年10月25日22時50分発行